

# 大鳥蘭三郎先生の御逝去を悼む

日本医史学会理事長 蒲原 宏

五月三十一日日本医学文化保存会の会議を終えて帰途、大村敏郎氏から宇都宮市の目黒医院で療養中の大鳥先生が危篤状態になられたと知らされ、思わず愕然とした。

慶大医学部弓道部で先生に私淑しておられた院長が先生のために病室を新築してお迎えし、全職員が父に仕えることく起居の御不自由な先生の治療、介護にあたっておられた。

先生はとても満足され、悠々と余生を過しておられると仄聞していただけに不吉な予感が脳裏をかすめた。院長以下全スタッフの御尽力の甲斐もなく、平成八年六月八日午後九時五分御逝去の報に肅然として諸行無常会者定離じやうりの理を噛みしめながら、瞑目合掌する他なす術を知らなかった。まさに巨星地に墜つ。何か大きなものが音をたてて体の中を通り抜けてゆく思いと、在りし日の先生との出会いの回想が混沌として頭の中を駆けめぐった。

先生に初めてお会いしたのは四十一年前、昭和三十年四月京都女子大学で開催された第五十七回日本医史学会総会の席上で、私が本学会に入会した翌年のことであった。

「明治前日本における西洋医学者による西洋医学教育の歴史」という先生の講演に魅了されさるとともに、あの大きな頭の中につまんでいる学殖はどれほどあるんだろうかと鑽仰と憧憬の念をつのらした思い出が鮮明に甦ってきた。訥々とした語りかけの中に心のぬくもりと誠実さが医学史研究に足を踏み入れたばかりで、学界にまだ一人の知己もない

私の心に伝わってきた。初めての懇親会も懐かしい。先生は四十七歳、私は三十一歳。遠い昔のこと。先生はまさに学者として脂の乗りきつておられた碩学であり、出島オランダ商館日誌などの基礎資料を丹念、超精致に渉猟され、日蘭医学交流史の研究を体系化されておられた時代であった。また、先生は日本学士院編の『明治前日本医学史』第四巻の「日本外科史」の項を担当しておられたので、「日本整形外科史」を研究の主題としていた私にとってはまたとない斯学の頼りになる先達でもあった。

不明な点についての遠慮ない質問にも懇切丁寧な教示をいただいた。文献のコピー、原典の貸出など、あたかも門下生のごとく、手をとり足をとりの御指導を受けることができた。

先生の学殖もさることながら、先生の出自の良さからくる大らかさと温かいお人柄によるものである。研究者にとつて広い学識と深い温くもりのある懐を兼ね備えて持つことはなかなか両立し難いのであるが、先生は自然随順ジケンの類い稀な学者であり、教育者であった。

学会を重ねるごとに先生への敬慕の念は深まるばかりであったが、学術的に誤った資料の提示とか不当な主張・論説に対しては厳しく的確を得た発言をされた。しかし、それにも拘らず決して敵を作ることがなかったのであるから、人徳としか言いようがない。肩肘を張らず、恬淡たる処世と学問の深さ、心の温かさが学生を、研究者を惹きつけたのである。

辛口の発言が必ずしも少なくなかったが、その中にエスプリがあった。発言された後のニヤリと笑われる細い象のような親しみのある眼まなこが紛糾をよぶことなく人を納得させたのである。不思議な魅力のある人とは先生のためにあった言葉だったのかも知れぬ。

オランダでの第一回日蘭交渉史シンポジウム（昭和四十四年九月）の旅、長崎での学会後の平戸への史跡探訪の旅など、先生は体の不自由にもめげず、自分の眼で確かめるといふ医史学者としての在り方を身を以て示されたのである。

先生御夫妻のお伴をして旅をすると、何処へ行っても慶大の教え子が現われ、先生の手足となった。その余徳にあずかったことは数えきれないほどで、平素の面倒見の良さと人徳をうかがい知ることができた。

お子様の無かった先生御夫妻は吾が子の様に学生達を愛し、大学を愛し、学問を大切にされた。先生の学術業績については贅言を必要としないが、先生の学問を蔭で支えて来られたなを夫人の先生の亡きあとの寂寥はいかばかりかと心が痛む。

平成八年六月十一日、慶應義塾大学の学旗に包まれた先生の御霊に「慶應義塾塾歌」を葬送の曲として雀の宮齋場でお別れをした。

前々理事長小川鼎三先生御逝去の後、昭和五十九年から平成四年まで大鳥蘭三郎理事長のもとで、本学会は学問的業績も学会運営も着実かつ順調な成長をたどって来たのであるが「病状からしてもはや任に在るを心よしとせず」と理事長を辞された潔さも、身の処し方の啓示として、亡き先生を敬慕申し上げることしきりである。驥尾に付したい。

先生の御遠逝されたいま、先生がこよなく愛し守って来られたこの学会を次の世代に無事継承して行ってもらうように最善の努力を傾けることが、先生の御遺志に添うことではないかと自戒を新にしているところである。

先生御生前の公私に亘る過ぎし日の御厚誼に感謝申し上げると共に全学会員を代表して心からの御冥福をお祈り申し上げます。次第である。

平成八年六月十一日